

最後のオーストリア皇帝、福者に。

10月3日、ヨハネ・パウロ2世はローマにおいて、ハンガリー・オーストリア帝国の最後の皇帝ハプスブルクのカール1世(1887~1922)を列福する予定である。そうなれば、20世紀の国家指導者としては最初の福者となる。聖体に捧げられた年の初めに、彼が列福されるのは偶然ではない。Fischer-Colbrayの司教はカールを聖体の皇帝と呼んでいる。2003年12月20日、ヨハネ・パウロ2世はカールの仲介に帰せられる治癒を奇跡と認定する文書に署名した。それは両足の炎症と激しい苦痛に苦しんでいたポーランドの修道女 Maria Zita Gradowska の治癒である。皇帝が英雄的に諸徳を生きたことを証明する文書は、すでに2003年4月12日に発表されていた。

* * * * *

ハプスブルクのカール(本名はカール・フランツ・ヨーゼフ・ルートヴィヒ・フンベルト・ゲオルク・オットー・マリア)は、1887年8月17日オーストリアの Persenbeug で困難な出産の末に産声を上げた。父はオットー・フランツ・ヨーゼフ大公、母はマリア・ヨーゼフで、時の皇帝フランツ・ヨーゼフの弟の孫に当たる。その当時カールが帝位につく可能性は極めて少なかった。

両親の結婚生活はそれほど幸せなものではなかったが、彼らは子供の教育には心を込めた。教育係りとして最も影響を与えたのは、Count Georg Wallis で、宗教教育は始めはドミニコ会士の Norbert Geggerle、ついで Gottfried Marshall 司教が担当した。

青少年時代

幼少より信心深い子供であった。家の礼拝堂での祈りをさぼることはなく、毎日夕方になると良心の糾明をし、Tafert の聖母の聖堂に行くのを好んだ。ある日、Reichenau の住人が火事で家を失って困っているのを知ると、貯金箱を壊し貯めたお金をその家族に渡している。またある日、無造作に投げた木の枝が聖母に捧げられた聖堂に当たったが、カールは神の母を傷つけたという思いで泣いてしまったそうだ。

青年期の逸話としては、アイススケートをしていて転び足の骨を折ったことがあったが、苦痛を隠し、また故意に彼に怪我を負わせた青年の名前を告げることをしなかった。

ウィーンのショッテン・ギムナジウムで学業を始め、後にプラハ大学で法律と経済を勉強する。

1903年16歳のとき、祖国への奉仕に召されているとはっきり感じて、帝国軍隊に入隊。大佐となる。同時に黄金のタイソン騎士団に入団。この騎士団の団員はどこにいても毎日ミサに参加できるという特権があり、彼はこれを気に入っていた。同僚から高い評価を受けるようになるが、彼らの中でも自分の信仰を公言することに何のためらいもなかった。また小さいときから続いていた「マグニフィカツ」や「お告げの祈り」を祈る習慣を保ちつづけている。

青年期に短期間であるが、信仰の試練を経験している。それは、一人暮らしを始め、純潔について不道德な助言を受けて戸惑いを感じたところでもあった。

ツィータとの結婚

1911年、結婚問題が浮上してきたが、そのとき真っ先に大公の頭に浮かんだのは、小さいときからの友人の妹ブルボン・パルマ家のツィータのことだった。彼はこのブルボン・パルマ家の家

庭的な温かい雰囲気にもいつも魅力を感じていた。

カールの祖母でツィータの叔母に当たるマリア・テレジア大公夫人が開いたパーティをきっかけに、この二人は付き合いを始め親しくなっていた。

結婚を前にカールはツィータに、自分が結婚生活でまんいち不忠実な行為を犯したなら24時間以内にそれを告げると神に約束したと言った。さらに、それは、自分の両親の不幸な結婚生活が互いの信頼の欠如に端を発していることを知っているからだ、と説明した。

結婚式は1911年10月21日に行われた。式を司式した Bisleti 司教は、ミサの中で教皇ピオ10世がわざわざ式のために書かれた説教を読み上げた。教皇は以前謁見に来たツィータに、彼女の未来の夫はいつの日か皇帝になる、また彼のキリスト教的な徳はみんなの模範になるだろうと言ったことがあった。

結婚して間もない頃、カールは新妻に「天国に行くために、今から私たちは互いに助け合おう」と言っている。事実式のすぐ後、二人は Mariazell の聖堂の聖櫃の前に行き、そこで二人を聖母の保護の下に置いた。この夫婦からオットー、アデルヘイド、ロバート、フェリッツ、カール・ルドウィック、ルドルフォ、カルロッテ、エリザベットの8人の子供が生まれる。

帝位継承と戦争

1914年6月28日、サラエボ事件が起る。叔父のフランツ・ヨーゼフ大公が銃弾で倒れたのだ。彼を継いだカールは、時代の激しい流れに巻き込まれるのをどうしようもなかった。ピオ10世教皇は、カールに手紙を送り皇帝に戦争の危険を十分に認識させるように頼んだ。しかし、タカ派のグループの陰謀のために、この手紙は間に合わず戦争が勃発した。

第一次世界大戦が始まると、カールは第20軍団の指揮を執ることになった。彼の活躍で、ルーマニア戦線ではロシア軍の進行を止め、イタリア戦線ではフォガリアで勝利を収める。しかし、カールはこれらの勝利に酔うことはなかった。彼は不必要な流血を避けるための最大の努力をし、負傷者や捕虜が適切に面倒を見られるように配慮した。砲弾が炸裂する中で、平静を失わずピオ10世から贈られた金のロザリオをつま繰っていた。そのロザリオは聖母への祈りを重ねた末、摩滅してしまった。

カールは兵士の面倒見のよさで人気を博した。イソンツォ川の戦いの際、川におぼれかけた男を水中に飛び込んで助けたことがある。従軍司祭であったロドルフォ・スピッツルによれば、アシエロへの過酷な行軍の中で、傷のために歩行不可能となった兵士を助けるためにとりなしたと言う。

1916年11月21日、皇帝フランツ・ヨーゼフが崩御。臨終の老帝につきそっていたとき、カールは自分が「陛下」と呼ばれるのを初めて聞いた。彼は新しいオーストリア皇帝となった。12月30日にはブタペストでハンガリー王として戴冠された。ツィータは、カールがこのときから自分の人生が臣民のためであり、彼らのために祈り苦しむことが自分の使命であるとの自覚をもちつけたと言う。

しかし、カールが引き継いだ国は衰退期にあった。ドイツの拡張によって弱体化し、イタリアを失い、バルカン半島はヨーロッパの火薬庫と言われ様々な問題を抱えていた。

平和の人

軍の指揮官としてカールは多くの戦いで武勇を示したが、いかに華々しい勝利であろうと、そこで行われた悲惨な殺戮を見過ごすことはできなかった。彼の信仰は、彼の内部に激しい葛藤を惹き

起こした。イソンツォの戦いの後、一人の写真家は皇帝が涙を流しながらこう言うのを聞いて驚いている。「誰もこのようなことを神の御前で申し開きすることはできない。できるだけ早くこれを終わらせなければ」と。

皇帝は和平交渉の計画すらないことを知り、外務大臣にその驚きを伝えている。教皇ベネディクト15世によって提出された和平案を受け入れたのは、カールだけだった。

義理の兄弟ブルボン・パルマ家のシクストとザビエルを通じて、フランスと秘密裏に和平交渉を始めた。しかし、1917年2月20日に同国の政権を引きついだ新政府は、この交渉を打ち切る。1917年3月24日、カールはフランス大統領ポアンカレに秘密の書簡を送り、ドイツが和平交渉を望まない場合でも、オーストリアは単独で和平条約を結ぶ用意があることを伝えた。しかし、親ドイツ派の外務大臣 Ottokar Czernin の卑怯な行為のために、フランス政府はこの交渉を暴露してしまった。

ドイツはこの和平工作を臆病のなせるわざとみなし、和平交渉は両陣営の近視眼的な考えによって失敗に終わった。戦後、社会主義者アナトール・フランスは述懐したこう言う。「大戦に参戦した国家の責任者の中で、カールだけが品位のある人物であったが、誰も彼に耳を貸そうとはしなかった。彼は心から平和を願っていたが、そのためにみんなから軽蔑されたのだ。こうして唯一無二のチャンスを無駄にしてしまった」と。

人格者

他方、カールは自分の権限を利用して戦争の悲惨さを和らげようと努力した。ドイツの大本営の司令官ハンス・フォン・ゼクトが東部戦線で毒ガスを使用しようとしたが、それに反対した。またイタリアの諸都市を砲撃することにも反対した。そうすれば合衆国が参戦してくると知っていたし、一般市民を攻撃の対象にすることは絶対に許されないと考えていたからである。

ヴィルヘルム・シュミット神父から、あらゆる前線で兵士のために家庭的な環境を作るというアイデアをとった。また兵士たちが、日曜日と祭日だけでなく平日にもミサに参加できるように配慮したり、兵士たちにロザリオを配るように努めた。捕虜の交換も積極的に推進している。

国家の元首として、当時人々の間に深く根を下ろしていた習慣であった決闘を禁止した。これによって、軍隊の多くの士官の指示を失った。一般大赦を出し、不正を償うために死刑を別に罰に替えた。これで救われた人の中に、ロシア皇帝のために祈ったかどで反逆罪で訴えられていたガリチアの農場経営者がいる。

カールは Rerum novarum (教皇レオ13世の回勅。労働者の権利などについての教説。訳者注) から刺激を受けて、高利貸しと汚職と戦った。彼は、政府に社会福祉の政庁を作った最初の元首である。またボヘミアとハンガリーの農地改革を計画した。すべての勅令の中で神の名に呼びかけていた。信者数の増大に教会の数が追いつかなくなっているのを心配し、ウィーンに教会を増やすように司教たちに提案した。

戦争による貧窮と食料不足を見て、カールは自分の家族の生活水準を引き下げた。皇帝の家族は一般人と同じ配給を受けるようになった。部下たちの驚きをよそに、バーデンの司令部では白パンを食べるのを止めた。カールの命令で、そのパンは病人と負傷者に配られた。

列福調査の「徳」に関する調査では、「個人的な利益を得ようと、君主としての地位を利用することは一度もなかった。その反対に、常に正義をもって行動し、国民の利益のため、神の国の発展のため、教会の自由のために働いた」としている。

カールは汚職と高利貸し、そしてあらゆる形の縁故主義を根こそぎにした。弟のマックスがウィーンで過剰に時間を費やしているのを見て、前線に戻り他の将校と同じ義務を果たすように命じた。

自己の地位を悪用している人々を罰した。アウフェンベルク将軍が大砲の砲弾の輸送について不当な謝礼を受け取ったかどで、戦争省の大臣の職を辞任させた。また、砲兵隊の司令官レオポルド・サルバドル大公には、自分の特許を軍隊に売って得た利益を軍に返還するように命じた。

これらの処置によって、ある種の人々や組織の敵意を買う。彼らは、いわれのない中傷（愛人を持っている、酒乱、結婚生活の不忠実、夫婦の不仲など）を流布させ、カールの名誉を毀損しようとした。彼らにとって、皇帝が首尾一貫したカトリック信者でありローマに忠実であることが我慢ならなかったのだ。

信仰に堅固

カールは強い精神力を持っていたが、その力は絶えざる神との一致から生まれていた。ミサには毎日あずかり、毎週赦しの秘蹟を受けていた。み心の礼拝を実行し、しばしば「十字架の道行き」を黙想した。毎日、「お告げの祈り」と詩篇50と90を祈り、またロザリオを好み、しばしば家族と一緒に唱えていた。マリアとヨセフの信心のために、子供たちのこの名前を付けた。

重要な決断を下す前には、いつも聖堂に行き、そこで聖櫃の前で問題を考えた。彼は問題を祈ると言っていた。

和平交渉が続いている間、ミサの後には「聖霊、来たりたまえ」を唱えていた。

長男のオットーが初聖体をした際に、家族全員と帝国のすべての国々をイエスのみ心に捧げ、毎月の最初の金曜日にこの奉献を更新していた。このほかに、臨終のときの祈りを頻繁に唱えていた。

世間体や一時的な利益を考えて、公に自己の信仰を隠すようなことはしなかった。キリストの聖体行列にも、さりげなく参加した。悪知恵の鋭いフリーメーソンに対抗して、最も有力なカトリックの新聞を弁護した。

ボヘミアでの教会分裂が終わるように祈り、イタリアに共産党の活動家を入れる計画に反対した。共産主義が宗教の敵であることを見抜いていた。

クレマンソーは「皇帝カールは中欧における教皇だ」と言ったことがある。皇帝の教会に対する忠実さは岩のように堅固なものだった。いくらかの教区が持っていた司教の候補者リストを提出する特権を放棄した。ベネディクト15世は彼を「私のお気に入りの子」と呼んだ。

1916年、教皇が平和を求める祈りを作ると、カールはいの一番にそれを印刷させた。一ヵ月後、皇帝の私的礼拝堂でそれを祈ることをやめたのを見て、祈りつづけるように命じている。

退位とスイスへの亡命

合衆国の参戦とともに戦況は急変した。1918年にドイツ陣営は降伏に向けての交渉を始めた。合衆国大統領ウィルソンは戦争終了のための14箇条の条件を提示。ルーマニアは協商側と和平を結び、ブルガリアは降伏。ポーランドとチェコスロバキアは独立を宣言。トルコは休戦条約を結び、ドイツ皇帝は退位した。カールは見事なまでに独りぼっちとなった。宮殿でも護衛の兵は一人残らず立ち去った。

カールは退位を迫られたが、彼は戴冠の際にした宣誓を考え拒否。しかし最後になって、流血の惨事を避けるために、11月11日国家的特権の行使を一時的に放棄するという文書に署名した。し

かしながら、その翌日帝政の停止が宣言された。カールはウィーンを去り、Eckarstau 城に退去する。

このような深刻な逆境の中でも、カールは毎晩“Te Deum”（感謝の祈り）を唱えた。Eckartsau では彼は捕虜の扱いを受けた。退位を迫る圧力は続く。オーストリアの社会党政権はカールの追放を決定。1919年3月23日、皇帝一家は亡命を認めてくれたスイスに移動した。4月3日、オーストリア政府は君主の追放とその全財産の没収を宣言。

複数の証言によると、スイスではフリーメーソンの代表者たちがカールの帝位復歸に協力すると申し出たが、それが自由結婚と自由教育、またフリーメーソンの合法化を許可する法律を制定するという条件付きだったためカールは受諾しなかったと言う。

王政復古の試み

カールは、ハンガリーが教会の防波堤になるようにというベネディクト15世の望みを知っていたので、1921年の3月と10月に帝位復歸を二回ほど試みた。一度目は12日後に失敗した。カールは内戦が起ることを避けるために計画を放棄したのだ。

しかし、彼が再度それを試みたのにはいくらかのわけがある。その一つは教皇がヨーロッパのソビエト化を危惧していたことである。

ハンガリーに行く列車の中でミサに参加できるように工夫した。しかし、王政復古の試みは失敗に終わる。カールは Tihany の修道院に監禁され、退位を迫られる。政府の代表者ホルティは皇帝に退位を決断させるために首席枢機卿 Janos Csernoch を利用しようとしたが、カールを戴冠した枢機卿はこの試みに手を貸すことを拒んだ。

とうとう皇帝夫妻は、行く先も知らされずに船に乗船させられドナウ川を下った。彼らの行く先はマデイラ島（ポルトガル）であった。

マデイラへの追放

1921年11月19日、カールとツィータはマデイラに到着。放逐の地で過ごしたカールの晩年の5ヶ月は格別に辛いものであった。追放にともなう屈辱と貧窮に加えて、初めて子供たちと別れて暮らすという寂しさがあった。しかし、不平も非難も彼の口からはこぼれなかった。家に着いて最初にしたのは、礼拝堂を作ることであった。

何ヶ月もたってやっと全家族が再び一緒になった。しかし、そのときショッキングなニュースが入る。家族の生活の支えにしようと考えていた先祖伝来の宝物が盗難にあったというのだ。Funchal で借りた家の家賃さえ払えない。ポルトガル人の農場主が、山の避暑のための家を譲ってくれたが、この家は湿気が高い上に3つの部屋しかなかった。家事手伝いも一人もいなかった。

カールは子供たちにカトリック要理と救いの歴史を教えることに専念し、また信心生活についても手ほどきをしていった。

1921年の大晦日に皇帝夫妻と一緒に聖体賛美式に参加し、Te Deum を唱える機会に恵まれた Maria Lackner は、自分にとってその年は忌まわしい年であったにもかかわらず、カールが心からの感謝と熱心さでもってその祈りを唱えていたことを見て感動を禁じえなかった。

マデイラ司教は皇帝の生き生きした信仰、謙遜、聖体への深い信心、ミサの中での深い潜心は見る人を感動させた、神への信頼を強調する。この司教は後にオーストリアの司祭に次のように打ち明けた。「皇帝カール陛下が、ご自分の病氣と死去で示してくださった模範以上に、いかなる

ミッションも私の教区民を感化しませんでした」と。実際、追放の憂き目にあった若い君主に対して人々は同情を寄せていたが、その気持ちはやがて深い敬意に変わって行った。彼の葬儀には3万人の信者が参列した。

病気と死去

1922年3月9日、健康が思わしくなかったカールは、山での散歩中に風邪を引いた。医者が診察に来たときには、風邪は肺炎になっていた。体の苦痛に苦しむ中で、妻と子供たちと祖国の将来の不安が彼を襲った。

4月1日の夕方、オーストリア皇帝カール1世は、后妃の腕の中で息を引き取った。「私のイエス。御身の聖なる御旨が成就せんことを。イエス、イエス、来たまえ。はい、はい。私のイエスよ、御身の望みのままに。イエス、イエス」と祈りながら。

その前の晩、后妃に語った言葉は、一生を通して実行してきた霊的なプログラムと言えよう。「私がこの世で抱いた唯一の望みは、あらゆることにおいて神が何をお望みかをできるだけはっきりと知り、それにできるだけ完全に従うことであった」と。この心構えこそ、不幸や逆境の中でも決して平静さを失わなかった理由である。

臨終の床のそばに聖体が顕示されていったが、息を引き取る少し前に赦しの秘蹟と聖体と病者の塗油を受けることができた。

カールは最後の苦痛を国民の和解のために捧げ、長男のオットーを呼んで別れを告げた。カトリック信者、また皇帝たるものは死を前にしていかに振舞うべきかを、長男に見せておきたかったのである。

カールが不遇のうちに誰にも知られずに息を引き取ったことは、考えれば考えるほど悲痛である。スペイン王アルフォンソ13世だけが若い皇帝が遺した未亡人と7人の子供たちのことを心配し、彼らを自国に引き取った。

今年10月のカールの列福は、歴史がこの偉大な人物に犯したと言える不正を一部なりとも償うだろう。

2002年11月20日、カールの長男オットー大公の90歳の誕生日に、シヨンボルン枢機卿はこの皇帝一家が舐めた苦しみに対して公に敬意を表した。

カールと教皇

オーストリアのカールはヨハネ・パウロ2世にとってなじみの深い人物である。教皇の父君カロルは、オーストリア・ハンガリー帝国の歩兵第12連隊の将校であった。クラコフ(ヨハネ・パウロ2世の故郷)は当時オーストリア・ハンガリー帝国に属していた。

1920年エミリア・ボイティーワが未来の教皇を出産したとき、夫と話し合った上で、赤ちゃんに「カロル・ジョゼフ」の名前をつけることにした。この名前は、ボイティーワ中佐が皇帝カールに抱いていた深い敬意を表しているようだ。そのために、数年前后妃ツィータとの謁見の際、教皇は「私の父の後妃に挨拶いたします」と声をかけられた。

PARABRA 486-487, VIII-IX-04, pp.454~458.